

学校编码: 10384

分类号\_\_\_\_\_密级\_\_\_\_\_

学号: 12220131152717

UDC\_\_\_\_\_

廈門大學

## 硕士学位论文

### 中日文化中鹿的意象比较研究

日中文化における鹿のイメージ研究

倪晨

指导教师: 郭颖 副教授

专业名称: 日语语言文学

论文提交日期: 2016 年 4 月

论文答辩日期: 2016 年 5 月

学位授予日期: 2016 年 月

答辩委员会主席: \_\_\_\_\_

评阅人: \_\_\_\_\_

2016 年 月

厦门大学博硕士论文摘要库

## 厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下,独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表的研究成果,均在文中以适当方式明确标明、并符合法律规范和《厦门大学研究生学术活动规范(试行)》。

另外,该学位论文为( )课题(组)的研究成果、获得( )课题(组)经费或实验室的资助、在( )实验室完成。(请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称,未有此项声明内容的,可以不作特别声明。)

声明人(签名):

年 月 日

# 厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文、并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版）、允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索、将学位论文的标题和摘要汇编出版、采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

（        ） 1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文、  
于        年        月        日解密、解密后适用上述授权。

（        ） 2. 不保密、适用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文、未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的、默认为公开学位论文、均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年        月        日

## 要 旨

鹿は日常生活でよくみかける動物である。ユーラシア大陸、ないしアメリカ大陸のとある地域で、角が太陽の運動や季節の移り変わりにより生長したり、抜けたりしているから、太陽の使い、大地の母神と見なし、復活能力を持っている生き物だと信じられている。また、その優雅な姿・足の速さ・優しい目・神聖な角などといった特徴によって、各国の人気を博している。日中両国の人々の暮らしの面においても、文学作品においても、ないし宗教の面においても、鹿に関する記述が大量に見られている。

本稿では宗教と文学の面から日中文化における鹿のイメージを考察したいと思う。まず、仏教において、鹿は常に釈迦様の前世として現れ、鹿群を人間の食欲から救うと同時に人間を救うことによって、救世主のイメージが強い。道教は鹿の薬用価値を重んじ、常に仙人の座騎として現れ、長寿の特徴を持っている。人間が鹿の肉を食べたら長生きできるという説も伝わっている。ほかに、鹿は富とかかわり、射殺不可の霊異性を帯びている。鹿を射たら、罰が身に当たるなどという。日本神道において、鹿は最初稲作文化とつながっている。鹿の血が畑を肥沃にし、苗を早く生長させる。鹿の角は雨にも関わっていると伝えられている。後、鹿は神使いや神として人々に崇拜されるようになった。

次に、中国の詩歌において、鹿は隠者、賢人として多見である。また、帝位、戦乱、自由自在な田園生活を象徴している。とりわけ影響深いのは「鹿鳴」という表現である。『詩経・小雅・鹿鳴』に由来し、君臣和睦の雰囲気を描写していると言われている。後、友人と別れを告げる場や、科挙関連の場にも使われるようになった。日本の漢詩からも別れを告げる場面、山居生活へ憧れる表現が見られる。しかしながら、日本の和歌で、鹿は秋を惜しむ、妻を恋慕う、秋を悲しむ場で多用である。感傷的・唯美的・風雅的な雰囲気を醸し出している。日本の漢詩はほとんど中国詩歌の影響を受けているが、「鹿鳴草」という和語表現が看過できない。上記の詩歌から、中国詩歌の写実性と日本和歌の叙情性を垣間見ることができよう。

以上のように、宗教の面では、仏教、道教および日本神道に見られる鹿のイ

メージを取り上げて分析を加えた。文学の面では、中国の上古、漢三国六朝および唐時代の詩作、また日本の和歌三大集『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』、『新撰万葉集』および平安時代までの漢詩を詳細に分析し、そのイメージの変遷と異同を考察してきた。

キーワード： 鹿 イメージ 文化 文学

## 摘要

对于鹿大家并不陌生。鹿经常以其优雅美丽的姿态、轻巧欢快的步伐、温柔可爱的眼神、圣杰光辉的鹿角出现在人们的视野中。除外观之外、鹿还拥有丰富的文化内涵。在欧亚大陆乃至美洲部分地区鹿因其角随太阳运转及季节变化而定期生长、脱落而被视为太阳的使者、大地的母神、拥有死而复生的能力。

本文试图从宗教与文学两方面考察中日文化中鹿的意象。宗教主要选取了佛教、道教以及神道。文学部分中国方面选取了《诗经》、两汉 魏晋南北朝以及唐代的诗歌、日本方面选取了和歌三大集《万叶集》《古今和歌集》《新古今和歌集》以及《新撰万叶集》和平安朝、平安朝之前的汉诗。

在佛教中鹿经常作为释迦牟尼的前世出现、将自己率领的鹿群从人类的贪欲下拯救出来、人类也因为克服自己的贪欲释放鹿王而获得救赎。鹿是救世主的形象。道教比较重视鹿的药用价值、鹿经常以神仙坐骑的形象出现、并有长寿的特征、人吃了鹿肉也会长生。除此之外、鹿还与财富相关、拥有不可猎杀的灵异性。在日本的神道中、鹿最初与稻作文化相关、鹿血可以令谷物快速生长、鹿角与雨相关。后来鹿多作为神的使者或者神而受到人们的崇敬。

中国诗歌中鹿多以隐者、贤士的形象出现。又象征帝位、战乱、自由自在远朝廷的生活。其中影响最为深远的是“鹿鸣”一词的表现、最初出现在《诗经 小雅 鹿鸣》中、象征君臣和睦、后来演变为与友人惜别及科举相关的表现。与友人惜别的表现日本汉诗中也有体现。日本和歌中鹿多用来惜秋、呼唤心上人、悲秋。呈现出感伤、唯美、风雅的特质。日本汉诗中的鹿与中国诗歌中的鹿形象相似、并出现了“鹿鸣草”这一和语表现。从诗歌中可以看出中国诗歌的写实性与日本和歌的抒情性。

**关键词：** 鹿 意象 文化 文学

## 目次

要 旨 .....	I
摘 要 .....	III
序 .....	1
第一章 暮らしの面における鹿.....	3
1.1 中国.....	4
1.2 日本.....	6
第二章 宗教の面における鹿.....	8
2.1 仏教.....	8
2.2 道教.....	10
2.3 神道.....	12
第三章 文学の面における鹿.....	16
3.1 中国.....	16
3.1.1 上代.....	16
3.1.2 漢・三国六朝.....	18
3.1.3 唐代.....	21
3.2 日本.....	29
3.2.1 和歌.....	30
3.2.2 漢詩.....	54
第四章 日中における鹿イメージの比較.....	56
参考文献 .....	60
謝 辞 .....	63



# 目 录

日文摘要 .....	I
摘中文摘要 .....	III
序.....	1
第一章 生活中的鹿 .....	3
1.1 中国 .....	4
1.2 日本 .....	6
第二章 宗教中的鹿 .....	8
2.1 佛教 .....	8
2.2 道教 .....	10
2.3 神道 .....	12
第三章 文学中的鹿 .....	16
3.1 中国 .....	16
3.1.1 上代 .....	16
3.1.2 两汉 魏晋南北朝 .....	18
3.1.3 唐代 .....	21
3.2 日本 .....	29
3.2.1 和歌 .....	30
3.2.2 汉诗 .....	54
第四章 中日鹿的意象比较.....	56
参考文献 .....	60
致谢 .....	63

厦门大学博硕士论文摘要库

## 序

鹿は日常生活でよくみかける動物である。その優雅な姿・足の速さ・優しい目・神聖な角などといった特徴によって、各国の人気を博している。人々の暮らしの面においても、文学作品においても、ないし宗教の面においても、大量の記述が見られる。

鹿については、既に多くの学者が関心を寄せている。日本の平林章仁氏は『鹿と鳥の文化史』に、『日本書紀』、『風土記』などの日本史料における鹿やアジア各国の出土品から発掘された鹿、古代日本の儀礼や呪術にみられる鹿を詳しくまとめていた。また、民俗学、歴史学的な面において井口樹生氏、考古学的な面では、石神裕之氏などの研究が見られ、鹿の農耕儀礼における重要な位置、猪との間に見られる不明確な点をめぐって論じられていた。『万葉集』の鹿の歌について考察を行った学者には、中西進氏、吉村誠氏、近藤信義氏、馬駿氏、木村孝子氏、川村幸次郎、堺信子氏などが挙げられる。さらに、中国の『詩経』や漢詩などの受容を考察した学者も数少ない。例えば、呉衛峰氏は『新撰万葉集』における「鹿鳴」に関する表現を『詩経』、漢詩のそのとの異同を対照してきた。また、竹岡正夫氏、小町谷照彦氏、杉谷寿郎氏などの学者は鹿に関する和歌を綿密に解釈した。石井祐啓氏、鶴田光枝氏などの学者は和歌における鹿を通時的に考察してきた。和歌のみならず、俳句における鹿を考察してきた学者も多出である。

一方、中国における鹿に関する研究もたくさん見られる。文学の面における研究は主に『詩経』に集中している。たとえば、岳泓氏の『「詩経・小雅・鹿鳴」「鹿」意象阐释』、呉崇明氏の『「詩経」中鹿的文化寓意及其演变』などが見られる。文化の面において、馬逸清氏の『中国的鹿文化』、李淑玲氏・馬逸清氏の『中国鹿文化的始源与演变』、郭孔秀氏の『中国古代鹿文化试探』、魏悦氏の『「鹿」字及文化初探』、李可繁氏の『談「鹿」和从鹿字的文化内涵』などの先行研究が多々ある。

ただ、日中両国における鹿のイメージの相違について、また論じられていないようである。よって、本稿は日本と中国における鹿文化をめぐって、史料や

文学作品にみられる記録や描写を整理して分析した上で、そのイメージの相違点を探ってみようと思う。

厦门大学博士论文摘要库

## 第一章 暮らしの面における鹿

『世界大百科辞典』によると、鹿は偶蹄類鹿科属の動物で、赤道附近から北極近く迄、各地の森林や草原に棲み、其の種類が多い。概して地方のものや高山のものが大きく、熱帯や平原の鹿は小さい。概ね牡のみ枝状に分岐せる角を生ず。其の質硬くして毎年早春にこれを脱し、角枝は或数に至るまでは年々これを増す、牝には角はないという。

山の木の色づく頃になると鹿が鳴き出す。其の声は「オーヒンヨー」と聞こえ、もっと遠くだと「ヒーヒョー」というふうに響いてくる。昔の人は「カイヨー」と聞いていたようである。トビの「パイヒョロー」に似ているが、もっと音量が豊かで、一種の哀調を帯びているという。<sup>①</sup>

鹿は一夫多妻なので、繁殖期の牡鹿は、ライバルの牡たちがいないと、柵を突きまくって、暴走してしまう。或いは、濡れた泥のたまり場をころげまわって、泥を体中に塗りつける。ライバルがいないと、牡同士が戦う。敗れた方は牝がそっくり横取りされてしまう。<sup>②</sup>

鹿の角や木の柁に、鹿の胎児の皮、ヒキガエルやネズミの皮などを張ることで、鹿笛を作る。鹿笛でピーと澄んだ牝鹿の声を出すと、気負い立った牡鹿が寄ってくる。鹿笛は牝鹿を捕らえる用の笛と牡鹿を捕らえる用の笛に分けられる。<sup>③</sup>

鹿は日常生活でよくみかける動物であり、古代アジア諸国の出土文品にも、鹿のイメージがたくさんみられる。

表 1.1 古代アジア諸国の出土品にみられる鹿のイメージ<sup>④</sup>

	説明	イメージ
朝鮮	二頭の鹿は矢あるいは槍を背負っている姿が出土した青銅製飾板に描かれた。	神が聖別する犠牲
新羅	ハズウ形陶質土器の肩部に二頭の牡鹿が見られる。	副葬品
	(瑞鳳塚・天馬塚・金鈴塚) 鹿角形立飾付金製冠。	副葬品

<sup>①</sup>小林清之介. 俳句動物記 3 鹿[J]. 俳句, 1986, (9): 176 頁.

<sup>②</sup>小林清之介. 俳句動物記 3 鹿[J]. 俳句, 1986, (9): 178 頁.

<sup>③</sup>小林清之介. 俳句動物記 3 鹿[J]. 俳句, 1986, (9): 179 頁.

<sup>④</sup>平林章仁. 鹿と鳥の文化史ー古代日本の儀礼と呪術[M]. 東京: 白水社, 2011: 65~71 頁.

モンゴル	(鹿石)	喪葬と繋がる
	石積祭壇であるオボには鹿像を置く。	喪葬と繋がる
	上天からの定命によって「この世に」うまれ「出」た蒼い狼があった。その妻は白い牝鹿であった。大湖を渡って来た。	発祥説
スキタイ	鹿を象った遺物が多く出土している。	喪葬と繋がる
	(竿頭飾) 西アジアに起源し、太陽や豊穡を祈る祭儀に使用されたと見られている。立竿は聖なる小空間と神の世界を結ぶ世界樹としての機能を働き、聖なる空間の標示物として葬儀に使用されたのではあるまいかと推測されている。	太陽や豊穡と繋がる

## 1.1 中国

では、まず中国における鹿の表記について見て見よう。『説文解字』では、下記のように解釈されている。

表 1.2 『説文解字』にみられる鹿の表記

表記	解釈	補足説明
鹿	獸也。象頭、角、四足之形。鳥鹿足相似、從匕。凡鹿之屬皆從鹿。	
麇	牡鹿。從鹿、段聲。以夏至解角。(亦作“麇”。)	雄鹿。
麕	鹿子也。從鹿、弭聲。	幼鹿。泛指幼獸。
麋	鹿屬。從鹿、米聲。麋冬至解其角。(也叫四不像。)	
麀	麋也。從鹿、困省聲。(亦作麀、麀。)	獐子。
麂	麋屬。從鹿、主聲。(亦名駝鹿。俗稱四不像。)	
麋	狻麋獸也。從鹿、兒聲。	幼鹿。
麀	牝鹿也。從鹿、從牝省。	母鹿。

鹿の字はその頭・角・目・四足の形に象る。「广」は角に当たり、真ん中の部分は鹿の横から見る目を連想させる。四足に当たる部分の比は「鹿の足はあい並ぶ、比に従う」とある。比はまた人の字を二字逆さにした形で、人と人があい接して親密なことを意味し、二つのものを並べることになる。鹿の種類にも牡鹿、牝鹿、小鹿などがある。

甲骨文において、麋の上に鹿を二つ加えると「麗」になる。鹿の皮二枚が窺える。皮に斑、模様がある。『礼儀・士婚礼第二』に「婚礼…納征、玄纁、束

帛、俚皮。如納吉禮。」とあり、結婚するとき、鹿の皮をプレゼントするのは当時の礼儀である。鹿の皮をプレゼントする行為に夫婦円満の祝意が含まれているという。<sup>①</sup>これは鹿の群れる習性に由来したのであろう。『詩経・召南・野有死麕』における「野有死麕、白茅包之。有女懷春、吉士誘之。」という鹿の皮を結納の品として使う風習もこれによるものであろう。

「慶」という字からも、鹿の縁起いいことを垣間見ることができる。小篆において、「慶」は鹿の下に心、心の下に足という三つの文字で表記されている。鹿の皮をプレゼントすることで自分の祝意を示す。ゆえに、「慶」は祝い場で多用である。「慶祝」、「慶生」、「国慶」、「校慶」などがその表現である。<sup>②</sup>また、『春秋運斗枢』に「瑶光散為鹿。」とあり、瑶光が光ったら、鹿になるという意味で、「瑶光」は瑞祥とされているから、鹿も吉祥の色を帯びた。今でも、鹿も縁起のいい動物として、代々の人に崇拝されている。

鹿の発音は「禄」と同じであり、仙人、桃と一緒に中国の伝統絵に現れる縁起物の常用セットである。鹿、仙人、仙桃を合わせることに福、禄、寿をもたらす意味が含まれている。

鹿の習性について、明の李時珍は『本草綱目』（獣部・鹿）で、「鹿、處處山林中有之。馬身羊尾、頭側而長、高脚而行速。牡者有角、夏至則解。大如小馬、黃質白斑、俗稱馬鹿。牝者無角、小而無斑、毛雜黃白色、俗稱麕鹿、孕六月而生子。鹿性淫、一牡常交數牝、謂之聚。性喜食龜、能別良草。食則相呼、行則同旅、居則環角外向以防害、臥則口朝尾間、以通督脈。」と記されている。鹿は常に山や林に棲む。馬の身、羊の尻尾をしている。頭長い、足速い。牡には角が付き、夏になると、抜ける。子馬の大きさと、白い斑ある、俗稱馬鹿。牝には角なし、小さくて斑なし、毛は黄白相間で、俗稱麕鹿。妊娠したら六ヶ月で出産する。一頭の牡に数頭の牝が従い、これを聚と呼ぶ。食物の面、鹿は亀が好き、草の良し悪しを弁別できる。食物があつたら、友を呼ぶ。移転なら群れる。休憩するなら角を外に向き、防衛する。伏すなら、督脈を通じるため、口を尻尾のほうに向く。

なお、鹿の像は副葬品で多用である。

<sup>①</sup>游修齡. 2009. “麕鹿”字义和古代文化[J]. 语言研究集刊、(0): 329 页.

<sup>②</sup>游修齡. 2009. “麕鹿”字义和古代文化[J]. 语言研究集刊、(0): 329 页.

表 1.3 中国の出土品にみられる鹿<sup>①</sup>

出土場所	説明	イメージ
湖南省長沙（戦国楚）	角の付いている伏臥姿の木製鹿像	副葬品
江蘇省漣水（戦国）	大きな角をもつ伏臥姿の青銅製鹿像	副葬品
河南省満城（漢劉勝墓）	角の付いている鍍金鹿像	副葬品
河南省信陽（戦国楚墓）	長大な角、丸い目、長い舌	避邪獣
湖南省長沙 （馬王堆一号漢墓）	朱地彩絵棺の頭部側板に仙山に登る二頭の白鹿画	神仙思想

鹿は日常生活でよくみかける動物である。中国においても、古くから、人々の生活に深くかかわり、聖なる動物として崇拝されるようになったが、以上の出土品にみられる鹿のイメージからも窺えよう。

## 1.2 日本

日本において、鹿は今でも神使として神聖視されている。春日大社をはじめ、数多くの神社で観賞できる。鹿は人々に親しまれている一方、その数の膨大さで田を荒らすや道路を塞ぐなど人に迷惑をかける動物でもあるようになった。

日本においても、鹿は牡鹿、牝鹿、小鹿に分けられると見られる。『大言海』に、

表 1.4 『大言海』にみられる鹿の解釈

名称	説明
か	鹿の本名。牡鹿ナリ、牝ヲ女鹿ト云フ。「鳴ク声ヲ名トス、「かひよトゾ鳴ク」など云ふ。」
志か	牡鹿、「夫鹿ノ転、女鹿ニ対ス」本名鹿ナリ。志かト云フハ、古クハ牡ノ名ニテ、牝ヲめかト云ヘリ、後世は牝牡二通ジテ、志かト云フ。
をしか	小牡鹿。「をハ発語」牡鹿ト云フニ同ジ、ヲスノ鹿。サヲシカ。後ニハ、牝牡二通ジテ云フ。
さをしか	「サハ、発語」。牡鹿ト云フニ同ジ、顕宗即位前記「牡鹿。此云ニ左鳴子加一」

と書いてある。ほかにも、『和名抄』（十巻本「鹿」）に、「陸詞切韻云、鹿音禄、賀、斑獣也、爾雅集注云、牡鹿曰麋音家、日本紀私記云、牡鹿、佐乎之加、牝

<sup>①</sup>平林章仁．鹿と鳥の文化史ー古代日本の儀礼と呪術[M]．東京：白水社、2011：68～69頁．



Degree papers are in the “[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)”.

Fulltexts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to [etd@xmu.edu.cn](mailto:etd@xmu.edu.cn) for delivery details.